

## LOS ANGELS

1974年、空港のロビーのソファに深くと身体を沈め、ボーディングの手続きを待っている細身の男。涼し気なブルーの瞳を目深にかぶった帽子で隠すかのようにして迎いを静かに見渡している。今やカリフォルニアに留まらず知名度、テクニクともアメリカを代表するギタリストとなった、ライ・クーダーだ。とりわけ彼のスライドギターは、ローリングストーンズを筆頭にありとあらゆるジャンルのアーティスト達が自分の作品に取り入れることを渴望している逸品だ。しかし彼自身は周囲の評判に惑わされる事なく淡々と独自の音楽の世界を築き上げている。彼の技術的な興味はギターを離れて弦楽器全般へと注がれている。良き相棒であるデヴィッド・リンドレイとともにラップスティール、ドブロ、パンジョー、マンドリン、リュート、バラライカ、ブズーキにいたるまで世界中の弦楽器を器用に操り、ストリングスマスターの名を欲しいままにしている。それでも彼の好奇心は留まるところを知らず新たな楽器の制作にも取り組んでいるが、完成したそれは彼のマニアックな感性を満足させたに過ぎない、およそグロテスクなものだった。袖の長い鮮やかな色のアロハシャツを着ている彼の今回の行く先はハワイだ。このところハワイアン・スラッキー・ギターに魅了されている彼は、何度となくハワイへ渡りギャビー・パヒヌイと彼等を取り巻く仲間達や家族という途方もない才能を見出してきた。ギャビー自身はスティール・ギターとスラッキー・ギターを弾く。そして歌う。そのどれもがアイランドスタイル、独特の香りを持った個性的なスタイルだ。それに

輪をかけギャビーの奔放な人間性によってもたらされた伝説的な素晴らしい出来事、醜聞、双方とも枚挙に暇がない。彼の歯がほとんどないのはすべて喧嘩によってへし折られたものらしい。「おれはLAには行きたくないな、行く度に歯がなくなるから。」とは本人の言葉である。ロスアンジェルス発ホノルル行ノースウエスト便、すでに録音機材一式と楽器はカーゴルームに納まっている。レコーディングのエンジニアやディレクター、レコード会社の関係者やマネージャー一行ともにライも搭乗口へと消えて行った。

## HAWAII

6月中旬のオアフ島は気候的に素晴らしい時期にあっている。多くの島特有の花々の開花時期にあたることもあって島全体が匂いたつかに感じられる時である。ホノルル空港の到着ロビーにはギャビーのファミリーと先行していたレコード会社の宣伝担当、そして現地のコーディネーターが迎えに来ていた。ライの一行はギャビーの待つオアフ島南西部の小さな町へと入って行った。ライとギャビーは2時間近くハワイアンスラッキーやスティールギターについて楽器に触ったり本を開いたりしながら話をしていった。2つの才能はお互いにそこにあるものが畏敬の念を抱くに値するものである事を瞬間に察知し、微笑み、談笑しながらその興行きの深さを確かめ合っているかのように見えた。ライのギターが届くと早速記念すべきレコーディングのためのセッションが開始された。ギャビーのためからの友人でありスラッキーの名手アック・アイザクスも加わり、まだうら若きギャビーの息子

達もそれぞれ楽器を持ち遠巻きながらその輪に加わろうとしていた。その後ハワイ島コナの北部へ移動し、連日のように本格的なセッションは繰り返された。多くのギャビーを敬愛するミュージシャン達も訪れ陽気に場を盛り上げた。ライとギャビーはお互いインスパイア&リスベクト（触発と尊敬）しながら歴史的なセッションを収録してしまった。最終的な仕上げをハリウッドのスタジオで行ない、1975年に「ギャビー・パヒヌイ・ハワイアン・バンド」vol.1、vol.2として発表されギャビーの生涯の一の大仕事となった。ライの方は、追って76年に世界的な大ヒットとなった「チキン・スキン・ミュージック」として発表し、両雄ともに代表作の一つとして残す事になった。

## AND, TO THE WORLD

あれから28年が経過した。年月の流れとは様々なものに変化をもたらす。1980年享年59歳でギャビーは天に召され、ゴシップも奇行も名演も全てが伝説となってしまった。その引き替えに3人の息子達がハワイアンミュージック界の重鎮となった。シリル、マーティン、ブラはパヒヌイファミリーの血脈と、ギャビーのハワイアンミュージックに対するスピリットを受け継ぎ、伝統を守るところは守り斬新に改革するところは大胆に行ないハワイアンミュージックを時代の音楽として提供することに成功している。ハワイにはオハナ（家族）という意識がある。それはある時は文字どおり家族を意味する時もあれば、師と弟子であったり、仲間であったりする。つまりはスピリットを受け継ぐという意識なのである。かつてスラッキーの奏法は各家庭や一族内で伝

承されて行くもので門外に出る事はなかった。パヒヌイ家のようにオハナによって受け継がれてきたのである。それが1人のミュージック・トラヴェラー、ライ・クーダーと、彼に見出された希有の天才ギャビー・パヒヌイによってスラッキー・ギターやハワイアンミュージックが陽の当たる場所まで運ばれて、その気持ちよさを誰でもかみかわるようになった。現在（いま）世界中で、それを聴いて、それを感じている僕らも彼等のオハナなのだ。僕らも偉大なギャビーのオハナになった。

ストーリーにはフィクションも含まれています。



*Gabby Pahinui*

essay&illustration 山内 久由紀 YAMAUCHI HISAYUKI

サーフ・ハワイアン・ミュージック・バンドという独自のスタイルで、心地良いサウンドを追求するブレ・ボーイズのメンバー。ギター&ヴォーカル担当。今年1月にPACIFIC 57 RECORDSからリリースされたCDも好調。7月5日、6日に横浜・大塚橋ホール「ヨコハマ・ハワイ・フェスティバル」出演決定！その詳細など最新情報は、<http://www.hawaiian-market.com> まで。